

六 花 12



俳句雑誌りつか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

茶立虫飯も点前も一つ碗

藤本安騎生作「自然」

水漬く枝にたまちほつれ月の波

十三夜京奈良漬にほろと酔ひ

もさ海老はあしのはやしよ田後泊

鳥取岩美温泉

秋雲で磨かばわが齒白からむ

印南野の端に美妃あり冬銀河

新蕎麦を味はひ尽したる白磁

丹波出石町

城垣を伝うてきたる鴨の冷え



床の間に灯しおきあり石路の花

延川邸

割箸の割れ占ひや夜鳴き蕎麦

猫抱けばわれも液体なる炬燵

日の差して岩にもどれる霜の朝

ぐつすりはグツドスリープクリスマス

あしらひの桜におよぶ冬紅葉

大きくさめ死んで終わったわけでなし

雪嶺抄

日の匂ひ

笹村 政子



秋草や風のはこべる日の匂ひ

四阿の明るうなりし萩の風

花蓼に風とすさびてをりにけり

蔓引かば沢のざわつく通草かな

鶺鴒や宮の土俵に溜まり水

横顔に秋日差しくる写経かな

捨舟に椋鳥のゐる河口かな

見返ればひとりと思ふ秋灯下

まぎれなき朝顔の紺夫逝きぬ

秋の蚊や母の墓前に亡夫のこと

取り囲む瞳の中で西瓜切る

小林はじめ

蜘蛛の囲をキャンバスとして雨滴かな

取り囲む瞳の中で西瓜切る

つくつくし心うつろに聞きぬたる

秋涼し旅の小物に小筆かな

ありのみの人のごとしや長十郎

とりかこむひとみのなかですいかきる　こばやしはじめ

「瞳の中で」が佳い。子ども達の瞳に注目されながら、西瓜を切る。どの瞳にも大きな西瓜しか映っていない。西瓜に入れる包丁に緊張感が走る。早く切って欲しいばかりか、公平に切るかも監視されているような気になるが、切る主人公は、皆に公平に、早く西瓜を切って、喜んで食べる姿を見たいのだ。現代では西瓜に見向きもしない子が増えたから、こういう光景をあまり見ないが昭和の時代は、よくあった家庭的一幕。

蠶螂のおつとこ前に枯れゐたる

田尻 勝子

とうろうのおつとこまえにかれいたる たじりかつこ

秋夕焼山の奥まで差し入れて

蠶螂のおつとこ前に枯れてゐて

滝の辺の緑を噛めば薄荷かな

すすき原で躓きすすきに生まれたり

信吾死して柳生博の森紅葉

蠶螂の貌を見てみると、おやつ結構男前じゃあないの、と見えた。普通の人なら、三角顔で宇宙人のような人は怖いと思う。が勝子にはそうは見えない。そこが勝子の勝子たるゆえん。蓼食う虫も好き好きという言葉に真実味が帯びてきた。この句、枯蠶螂というのを踏まえて、枯れている男前としたから、面白いと思うのだ。「だってえ、小顔で、緑の目もきれいだもん」と勝子は反論するに違いない。枯色（茶色）のカマキリはメスと勘違いされるが、幼虫の脱皮直前の変化によって違う色になる。緑と茶色で雌雄が違うというのは俗説。

墓参

佐津のぼる

墓参には帰るむかしのままの村
盆近し路傍の供花の替へてあり
墓洗ふ水浸く屍となりし叔父
蹤き来たる犬の膝折る墓参かな
門火焚く山国の日は山に没り

花野

升田ヤスエ

バス酔の花野の酔となりにけり
虎の尾のくすぐつてゐる山の空
工作の花火にありし裏おもて
滝に身を委ねてゐたる一壺天
稲架掛けや稲たば少しねぢりては

鳶

志方 章子

木洩れ日と思へぬ強さ土用入
蝉の殻はがすに力いりにけり
鳶鳴いて涼しくなりし夕べかな
新涼の一瞬眼つむりけり
逆立ちや足裏まつ白日焼けの子

菊枕

藤生不二男

虫の音のときにたかぶる闇のあり
戻りこぬ高みを飛べり秋つばめ
べつたりと婆の控へし地藏盆
網干なる澄雄生地や鯉飛べり
菊枕頭を納むれば匂ひけり

背を向けて何か食べをり夜店番 升田ヤス子

板粕をしくと割りけり一夜酒

象鼻杯はや葉のくたと酔うてをり

白南風や水擦るやうに鷺の飛び

背を向けて何か食べをり夜店番

朝曇り鎌の切れ味悪からず

せをむけてなにかたべおりよみせばん ますだやすこ

電灯の陰で夜店番が客に背を向け、何かを食べている。箸を使っているからどうやら夕食らしい。團欒でゆっくり夕食をとるわけにもいかない。食べ物も食卓とはちがい、仲間の商売物にちがいがなく、しかも立って食べている様子まで見えてくる。その姿が、どこか世間に背を向けているようだが、切なさや哀愁を帯びている。

雪樹集



秋雨

赤松有馬守破天龍正義

ちやぶ台に秋刀魚一尾メモひとつ

秋雨に乳房重たき野犬かな

仏壇に供へ七夕飾りかな

抜け道にめんこい通草ひとつ垂れ

退院の姉に差し掛く白日傘

妻の秋

谷口 一猷

仕舞屋の背戸に朝顔育ちゐて

手鏡に目尻捉へる妻の秋

秋めくや酔ふほどに口数の減り

みんみに誘はれ来し虫地獄

俳名で呼ばれし集ひ秋晴るる

笑顔

溝渕弘志

地球から飛びたつてをり流星

少しだけ色付く紅葉見てをりぬ

行列の出来る売店吾亦紅

追ひかける蜻蛉と逃げ回る蜻蛉

秋祭笑顔溢るる家族かな

滝

延川五十昭

龍王を祀る社や滝しづか

古堂に蜥蜴の背中輝けり

岩肌をつたひて滝の水しづか

走り根のかに歩きする滝の道

岩穿つ修験の道や滝の音

滝の道

住田千代子

不機嫌な顔にて夜店去りにけり

あさがほを破りしほどの雨上がる

奥山にけもの臭へる滝の道

堂々と落つる男滝の轟けり

滝音を心静かに茶屋にかな

蟪蛄

田尻 勝子

秋夕焼山の奥まで差し入れて

蟪蛄のおつとこ前に枯れてゐて

滝の辺の緑を噛めば薄荷かな

すすき原で躓きすすきに生まれたり

真吾死して柳生博の森紅葉

山薊

廣畑 育子

虎の尾を仰ぐ有馬の筆屋道

片蔭に炭酸煎餅焼く匂ひ

臭木咲く出湯の沢の鳥地獄

坂道にとげのはみ出す山薊

梨と供華有馬芸者の手向けける

蛩雪譚

二十九年十月一号から

秋草や風のはこべる日の匂ひ

笹村政子

「秋草」はいわゆる秋の七草などのように、名のある草でなく、諸々の名もないような草のこと、そのことが却って親しみを感じさせるような、可憐な草。青々とした季節は移ろい、やや乾いた感じもするから、その匂いも乾いたような日のおいだと感銘する。それが秋風によって運ばれ漂ってきたので、一層秋の訪れを感じるといふ風情の句。秋草のにおいの風が、大きな出来事があった作者にとつて生涯忘れられない匂いになるのである。

墓参には帰るむかしのままの村

佐津のぼる

「墓参」は秋の季題。年に一度はふるさとへ帰つて墓参する。古里のよさは何より時代の変化の中で、昔から少しも変わつてないところを見つけること。若い頃は墓参りなど敬遠するが、高齢者と呼ばれる年齢に達するとなぜか故郷が懐かしく、墓が懐かしいのである。人は変化を嫌う。今のままがずっと続けばいいと内心願うが、「行雲流水」非情であり無情である。無情とは変わっていくことなのである。それを覚悟している必要があると、僧侶は自らに言い

聞かせるように諭す。不変のように見える石にも人にも風化や変化は起こる。墓地はすでに無縁墓が増え、寺には檀家が減っている。世の人の意識も変化してむかしのままではなくなってきた。「むかしのまま」は心の財である。

バス酔の花野の酔となりけり

升田ヤス子

花野とは秋の草花が咲き乱れる野原のこと。春の華やぐ野とは違い、秋風に吹かれる花々は華やかに哀れをさそう。特に代表的な花野といえばコスモスが思い浮かぶ。作者は乗り物酔い、とくにバスに弱いという。だから、車で皆と吟行にでかけるときには乗り物酔いの薬を持参する。掲句は酔いながらバスを降りてほっとするまもなく、「バス酔い」が花野の見事さに「花野酔い」にすり替わっているよ

とおどけて見せたゆとりである。

主宰も昔バスには乗る前から

酔うほどだった。子どもの頃日

光と箱根では地獄の二乗くらい酔いで、死ぬかと思った。だから、この句の心情が痛いほど伝わってくる。今は高齢になつて酔うということも鈍くなつて、結構酔わない。が代わりに眩暈が起るから同じ。めまいも生きている証拠だつて……。



六り花っ集か
六し花せ集う

延川 笙子

幻の七種の滝によろめけり

滝道をあえぎあえぎで登りけり

みんなの古道下りて膝笑ふ

この人と終の栖の凌霄花

漁りの浜に孤舟の秋夕焼

小林はじめ

蜘蛛の罟をキャンバスとして雨滴かな

取り囲む瞳の中で西瓜切る

つくつくし心うつろに聞きゐたる

秋涼し旅の小物に小筆かな

ありのみの人のごとしや長十郎

太陽の血のにほひ立つ蕃茄かな

岩山の松に兆せる晩夏かな

浜田久美子

善野

焔

渴く時夾竹桃の赤さかな

アスベスト工場跡や夾竹桃

信号のいくたびも赤長崎忌

木洩れ日に乗せてくるりと秋日傘

鉦叩きこんなにも鳴いていたなんて

朝顔や無学な母のひとりごと

皮靴少し破れて風天忌

吾亦紅われも俳句に生かされて